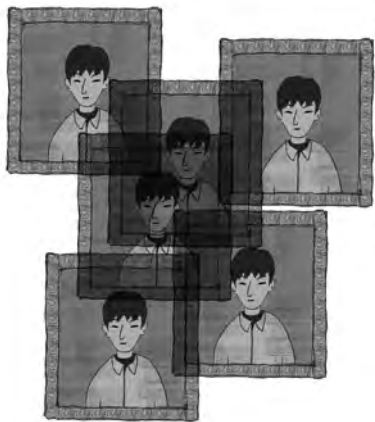


4  
時間の迷子



美術館へ出かけて、ひととおり展示を鑑賞し、  
（さて、帰りますか）となったところで、「常設  
展」の表示に気づく――。

そうしたことは、これまでも何度かあった。  
でも、およそ観た<sup>み</sup>ことがない。でなければ、何を  
観たのか、ほとんど記憶になかった。

ましてや、メインの展示が素晴らしく、映画で  
も観たような心地になっていれば、そこに蛇足を  
加えようとは思わない。むしろ、その快さが消え  
ないうちに自分のテリトリーまで持ち帰りたい。  
そのうえで言えば、まさにそうした心持ちで自  
分のテリトリーへ――いつときの別世界から、い  
つもの自分の町へ、（さっさと帰ろう）と足が向  
いていた。

にもかかわらず、誰かに呼びとめられたかのよ  
うに、（もしかして）と頭の中をよぎったのだ。  
（もしかして）のあとには言葉がなく、ただ足が

自然とそちらへ向いて、「常設展」の表示に従いながら細い通路を進んでいた。

通路はいったん突き当たって直角に折れ、そこからまた同様の細い通路をしばらく進んで、ようやく展示室にたどり着いた。

そこは企画展の展示室とはあきらかに違う空気が感じられ、とりわけ、いま観た展示がひとつながりの流れを持ったコンセプトチュアルなものであったせいか、よく言えば、穏やかに見え、より率直に言えば、雑多な寄せ集めであることが見てとれた。節操がない、と言ってしまったら言い過ぎだろうか。

展示室の隅に解説が掲示され、展示されている作品は、いずれも「作者不明」であると記されていた。「無名」ではない。「不明」だった。そうした作品がこの美術館には数多く集められ、館長の言葉として、

「これらの作品は、それぞれの事情によって出自が分からなくなったものです。」

とあった。

「有事による混乱。作者の転居や死去による不明。廃棄されたもの、盗難にあったもの、あえて名を伏せて描かれたものなど、理由はさまざまです。

いわば、迷子となった作品群ですが、不明であるがゆえに、まっさらな気持ちでご鑑賞いただけるものと考え、この展示に至りました。」

館長の言葉をふまえて、ひとつひとつ絵を観ていくと、「迷子」という言葉がもたらすイメージが重ねられて、その向こうにいるはずの作者の姿や絵を描くときの手つきのようなのがほんやりと浮かんでくる。

ポール・モカシンの展示にも一点一点に添えられてしかるべき説明やキャプションの類がなかった。こちらの展示にも、当然、そうしたものは見られず、すべて、不明の作者による題名も分からない絵だった。

ただ、これらの絵がいずれも「迷子」で、そんな迷子に囲まれながら絵を観ていると、なんとも妙な心持ちになってきた。作風はさまざまで、描

かれているものも、静物、風景、肖像と多岐にわたっている。何が描かれているのか分からないものもあり、そのうち、これらの絵画がひとつの大きな力によってここに集められている——そんな気がしてきた。おそらく、先に観たポール・モカシンの展示が、深い海の底から始められ、次第に海面へ向けて上昇し、最後に巨大な白い鯨があらわれたことが影響しているのだろう。

あの白い鯨を神様のようなものに見立てるのは正しいかどうか分からない。でも、偶然かもしれないが、美術館の中心と言っていい空間にあの鯨がいて、その中心を見据えながら、深い海に生息する魚がいたり、こうして迷子になってしまった名もない絵が並んだりしている。美術館全体がそうしたひとつの作品のようで、そのただ中に、いま自分は置かれているのだと、理屈を通り越して体が実感していた。

\*

最初、常設展の展示は狭くも広くもないひとつの展示室に限られているのかと思っていた。ところが、その展示室の奥にさらにもうひとつ部屋設けられていて、矢印が示す表示に従って、いまいちど薄暗い通路を歩かされた。

それは、これまでの通路よりひとまわり細く、心なしか天井も低く感じられた。ひっそりとどこかへ抜けていくような通路で、まっすぐに長く、その突き当たりの壁に一枚の絵が飾られているのが遠目に見えた。照明が当てられていて、そこだけ空から光が当たってるみたい、ほんのりと明るい。

目を細めてみた。

肖像画のように見えたが、相変わらず、眼鏡の度が合わなくて、もうひとつはつきりしない。

なぜか、そこで立ちどまった。

それもまた理屈ではなく、体が勝手に反応して、前へ進む力に躊躇ちゆうちよが及んだ。身がすくんでいた。

突き当たりまで、あと五メートルほどだ。どこから、そのためらいが来るのか、どうして自分は足

をとめて前へ進むことに躊躇するのか――。

(分らない)

胸の中に自分の声が響き、分らないけれど身がすくむこと自体が、おそらくは答えだった。

しばらく、そこにそうして立ちすくんでいた。

もし、自分の視力が申し分ないものであったら、すぐに答えは出ていただろう。

「おそらく」

立ちすくんだまま声が出て、

「あの絵だ」

と、ここへ来た本来の理由に引き戻された。

その五メートルをどんなふうに縮めていったのか、体は覚えていない。おかしな話だけれど、自分がいくつかに分離したような感覚に襲われた。そのほの暗い通路で、僕は探していた絵を見つけ出しただけではなく、たしかに十七歳の自分と再会していた。

五メートルを縮めて、数十センチの距離で絵を見つめ、しかし、見つめる自分の目が、向こうか

らこちらを見る十七歳の目に射られる。

すると、途端に視点は逆転し、絵の中の自分が三十二歳になった自分を見つめていた。

(ああ、これは自分だ)

十七歳のときに鏡の中に見ていた自分の姿だった。正確に言うと、鏡の中の自分は左右が逆になっているので微妙になじまないところもある。が、そのころ誰かに撮られた写真を横に並べれば、すっかりそのままであるに違いない。

ラジオに葉書を送ってくれたリスナーは、この絵の中の顔を見て、いまの僕と照らし合わせた。ということは、この十七歳の僕は、いまの自分に含まれていることになる。

考えたこともなかった。

でも、ごく普通に考えてみれば、僕はこうして変わらず僕のまま生きているのだから、十七歳の自分だけではなく、五歳の僕も、二十歳の僕も、二十九歳の僕もいまの自分に含まれている。

絵に出会えた嬉しさも大きかったが、自分の中



にいくつもの自分が含まれていることに驚いた。少し背筋が寒くなるような、そんな変な感じがして、それはきつと、自分の記憶よりも目の前の絵がリアルに描かれていたからだろう。

十七歳の自分が、この絵を見たときは、このリアルさを直視できなかつたように思う。恥ずかしさと恐ろしさが入り混じった気持ちを覚えていて。でも、いまこうしてあらためて目の当たりにすると、<sup>た</sup>多々さんの描写は——そうだ、あの映画館の看板にもあらわれていたけれど——驚くほど正確で細密なものだった。

観れば観るほど、こちらの主観がなくなっていく。自分はどちらでもあり、どちらでもない。

いや、もちろん三十二歳の自分がいまの自分なのだが、美術館での時間が長引くと、時間がどんな意味を持つのか分からなくなってくる。

ここでの主役は展示された作品だ。作品にこめられた時間の方がこの場においては有効で、絵を観る者は、いまこのひとときから行きはぐれて、それこそ時間の迷子になる。

美術館においては、きつと、迷子になることが正しい姿なのだ。

その絵は他の作品と同様、きちんと額縁におさめられ、しかし、何ひとつ説明らしきものがない。でも、間違いなく十七歳の僕を描いた多々さんの作品で、少しずつ冷静になって正しい自分を取り戻すと、なぜ、この絵が「迷子」になってしまったのか、そこが気になった。

これまでの自分であれば、目の前の事態をそのまま受け入れて、余計な口出しはしなかった。でも、こればかりは訳が違う。絵が見つかったことは何よりだったが、僕の願いはその先にあった。多々さんにもういちど会うことはできないだろうか――。

むしろ、絵を見つけ出すことより、そちらの方が自分にとっては重要だったかもしれない。

「あの」

と僕は展示室の隅に向かって声をかけた。

そんなことは滅多にしない。というか、初めて

だった。そこが静けさを保った場所であればなおのこと。少なくとも、声をかける前に隅に座っていた係員に近づき、なるべく静かな声で済むようにしたはずだ。

なのに、「あの」と声をかけていた。

たぶん、係員の女性がこちらを気にしていたからだ。僕がその絵をあまりにじっと見ていたからだろう。

（いえ、怪しい者ではありません。ただ、訊ききたいことがあるというか、お伝えしたいことがあるというか——）

離れた距離から声をかけてしまったことに舌打ちし、（落ち着くように）と自分に言い聞かせながら、係員の女性にゆっくり近づいた。

あらためて、「あの」と声をかける。

「はい？」

女性はわずかに眉根にしわを寄せてこちらを見ていた。黒縁の眼鏡がよく似合い、胸に「金沢」と刻まれたネームプレートを付けている。

「あの——あちらの絵について、お話ししたいこ

とがあるんですが、どなたにお尋ねすればよいのかと思ひまして」

「はい」

女性は——金沢さんは展示室を見渡し、われわれ以外に誰もいないことを確かめると、

「お話というのは、どういったことでしょう」

と、もつともなことを訊いてきた。

「ええとですね」

僕はなるべく小さな声で説明する。

「こちらに展示されている作品は、どれも作者が不明なんですよね」

「はい」

金沢さんは中指を眼鏡の真ん中にあてて押し上げた。

「作者不明の作品を集めて展示しています」

「ええと——」

僕はどう言つてよいものか、しばし考えた。

「あの」と多々さんの絵を指差し、「あの絵を描いた人を知っているんですが」と小声を保つ。

「作者をご存知でいらっしゃるといふことです」

か」

金沢さんの表情にわずかな変化があった。「失礼ですが」と声をひそめ、「それは、あの、確かなことなんでしょうか」と、また眼鏡のずれを直した。ねじが緩んでいるのか、すぐにずり落ちてしまいうらしい。

「ええ」

ここぞとばかりに僕は大きく頷いた。

「間違いありません」

「ええと——」

今度は金沢さんが言葉を選んでいた。

「それは、あの——どうして間違いないと言えるんでしょうか」

「そうですね——沈黙——」「ええと」

あまり言いたくないけれど仕方がない。

「あの絵のモデルは僕だからです」

それから金沢さんがとった行動はなかなかユニークなものだった。あたりを確認してから中腰の姿勢で立ち上がり、中腰のまま絵の前まで移動し

て、しばらくじっと絵を眺めていた。それから、また中腰のまま戻ってきて、何ごともなかったかのようにパイプ椅子に座り直すと、ふたたび眼鏡のずれを直すふりをして、僕の顔をじっと見ている。

「本当のようですね」

金沢さんは確信したように頷いた。

「もしかして、わたしがお役に立てるかもしれない」

そう言うと、金沢さんは中腰ではなく背筋を伸ばしてすっと立ち上がり、ポケットから携帯電話を取り出して素早く操作した。

「交代、お願いします」

それだけ言うと、

「どうぞこちらへ」と展示室の対角線にある扉へ僕を誘った。壁面と同じ色に塗られた目立たない扉で、金沢さんは静かにドアノブをまわすと手馴れた様子で音を立てずにドアを開いた。

「どうぞ」

やはり展示室と同じ淡いグレーの壁が両側につ

づき、先の通路とは違う、十分な幅をもった廊下の先に行く金沢さんに従った。

頭の中で、エントランスからここへ至るまでの順路を描こうとしてみたのだが、ポール・モカシンの展示をどのように進んだか、すでに思い出せなかった。だから、自分がいま美術館のどのあたりにいるのか、さっぱり分からない。

どうしてこんなことになったのか——まるで迷宮の内奥に迷い込んだ気分で、その挙句に行き着いたのは、学芸員の方たちが待機している事務室だった。館内を映し出したモニターが並び、デスクに向かった数名の学芸員が、カチカチとパソコンのキーを打っている。応接用のソファが窓ぎわにあり、窓の向こうには中庭らしきものが見えた。整然と刈り込まれた植木の中心に、黄色い果実を实らせたシンボルツリーが聳そびえている。

「どうぞ、そこへ」

ソファに座るよう促され、中庭の果実に見とれながら腰をおろすと、差し向かいに座った金沢さんが、

「おいくつのおときですか」

と突然、訊いてきた。

「はい？」

「あの絵のモデルをされたのは——」

「ああ。十七歳のときでした」

「十七歳ですか——」

金沢さんは手もとに開いた手帳に、「十七歳」とつぶやきながらメモをとっている。

「失礼ですが、お名前は？」

「名前？ というのは僕の名前でしょうか」

「ええ、そうです」

「僕は曾我そがと申しますが」

「曾我さん——」

金沢さんはメモをとりつつづけ、それから、おもむろに手帳から顔を上げて窓の外を見た。

口の中で言葉を咀嚼そしゃくするように、「曾我さん、十七歳」と繰り返している。そのうち、

「あの」

とこちらへ視線を戻し、

「ちなみにですが、あの絵を描かれた方から曾我



さんは何と呼ばれていましたか」

「何と呼ばれていたか？——そうですね——それはもう、曾我君とか、そんな感じでしたけど」

「では、仮にですが、あの絵のタイトルを、〈十七歳の曾我君〉と、させていただいてもよろしいでしょうか」

そう言つて、金沢さんは眼鏡をずり上げた。

「ええ、僕はもちろん構いませんが、あくまで、仮題ということですよね」

「ええ、あくまで仮題です。このあと、いくつか事務的な手続きが必要なので、仮でもいいので、題名があると通りやすいんです」

そういえば、あのとき多々さんは、あの絵に題名を付けていただろうか。たしか、題名などなかったように思う。もし、誰かに訊かれたら、絵に描いたとおりのことを——つまりは、〈十七歳の曾我君〉と答えていたかもしれない。

多々さんはそういう人だった。小さなことにはこだわらない。はたして、絵の題名が「小さなこと」なのかどうか分からないけれど、大切なのは

キャンバスに描かれたもので、

「題名なんて、どうでもいいのよ」

多々さんの声が聞こえてきそうだった。

金沢さんの言う「事務的な手続き」は、さほど込み入ったことではなく、どうやら、常設展を開設してから、何点か作者が判明した作品があったらしい。そうした経緯から、判明したときのためにあらかじめ書類が用意されていて、おそろしく分厚いファイルにまとめて綴じられていた。

金沢さんの質問に答えるかたちで、多々さんのフルネームを伝え、当時の多々さんの住所を——うろ覚えだったけれど——美術館のロゴが入ったメモ用紙に書いて渡した。僕の名前と連絡先も伝え、そのうえで、多々さんがいまだここに住んでいるのかは分からないし、そもそも健在であるかどうかも分からないと伝えておいた。

「むしろ、僕の方が知りたいくらいで。ですから、もし、何か分かったら連絡をいただけませんか」

「ええ、それはもちろん」

そう言って、金沢さんはまた窓の外を見た。

「というか、これは曾我さんにお話ししていいかどうか、判断が難しいのですが——」

窓の外を見たまま語尾を濁した。そんなふうに言われたら、その先を聞かずにいられない。

「なんででしょうか」

「じつは、あの絵について詳細を知りたいという人がもうひとりいます。やはり、何か分かったら連絡が欲しいと——」

「その人は、あの絵について何かご存知なんですか」

「いいえ、そうではないんです。その人は——なんとというか、あの絵にひどく惚れ込んでしまって、惚れ込んだあまり、うちの美術館でしばらく働いていたんです。あの絵について知っている人が、いつか現れるんじゃないかと、ここで働きながら待っていたんです」

「え？ となると」

「ええ、曾我さんがここにこうしていらっしやっ

たことを、彼女に——ええ、女性なんです——彼女に伝えることになるかと思いますが、どうでしょう？ 伝えてもよろしいでしょうか」

「そうですね——」

咄嗟とつさにどう答えていいか分からなかった。

あの絵に惚れ込み、それほど深く興味を持って  
いるなら、じつのところ、何か知っているのかもしれない。いや、そうでないとしても、どうしてもあの絵にそこまで興味を持ったのか、できればその人に会って、直接、訊いてみたかった。

「その方は、なぜ、あの絵に興味を持たれたんですしょう？」

「ええ」と金沢さんはひとつ頷いてから小さく咳せき払いをし、こちらの問いに答えるかわりに、書類に記されていたその人の言葉を読み上げた。

「わたしは、あの絵に描かれている、あの青年が誰なのか知りたいんです。そして——できることなら、あの絵の中の彼に会ってみたいんです」